

収蔵品レスキュー活動の概要―博物館部門

鈴木勇一郎

令和元年一〇月一二日の被災直後、地下は完全に水没し、一階近くにまで水が溜まっている状態であった。地上は、展示室の一部の壁が破損したくらいで、あまり目立った被害はなかったが、地下階の状況の詳細はまるで不明であった。収蔵庫を含めた地下階は全没し、時間が経過するとともに被災の規模は非常に大きいことが明らかとなってきた。

こうした状況に川崎市市民ミュージアムだけで対処することは非常に困難であった。そこで国立文化財機構文化財防災ネットワーク推進室から外部支援団体による収蔵品レスキュー活動の枠組みが整えられていった。博物館部門も神奈川県博物館協会をはじめとする様々な団体などのご協力を仰ぎ、作業が進められることになった。

博物館部門の収蔵品は、第一収蔵庫に民俗、第二収蔵庫に考古、第三収蔵庫に歴史と民俗分野の収蔵品が一部というように分野別に収蔵されていた。考古の収蔵庫には埋蔵文化財が多く保管されてきたこともあり、考古分野の収蔵品レスキューは教育委員会事務局文化財課主導で行うことになった。民俗分野の収蔵品は、文書史料に比べて、農具類などは耐久性があることとされたこともあり、第一収蔵庫からの収蔵品の搬出は当面見送られることになった。従って、博物館部門が最初に取り組んだのは、第三収蔵庫からの歴史分野の収蔵品の搬出であった。その多くが近世から近代にかけての古文書類である。収蔵庫内に散乱するこれらを袋に詰め、折りたたみコンテナに格納するという流れで作業を進めた。

この間、民俗分野のレスキュー活動は、第三収蔵庫にある灯りコレクションなど、一部の収蔵品の取り出しなどに限定されていたが、歴史分野の収蔵品レスキューが軌道に乗ってきたこともあり、年が明けると第一収蔵庫を再び開いて、民俗分野の収蔵品レスキュー活動を本格的に始めることになった。人間文化研究機構国立民族学博物館の日高真吾氏の指導と助言をもとに、作業は収蔵庫から搬出、洗浄、乾燥、エタノールの塗布、館内での一時保管という流れで進めることになった。複数の収蔵庫で同時に作業が進んでいくことで、レスキュー活動の規模も次第に大きくなっていった。一月半ば以降になると、神奈川県内や全国各地からの数多くの学芸員に加えて、市民文化局内所属職員もレスキュー活動に参加するようになった。令和二年の二月には、一月から収蔵品レスキュー活動に入っていた所管部局である市民文化局内所属職員に加えて、川崎市役所全体を挙げての大規模な支援が入るようになったが、三月後半になると年度末と新型コロナウイルス対応のため、市職員からも大規模な支援を得るのは難しくなった。その後も新型コロナウイルスの影響もあり、外部支援団体の応援が止まってしまった。気温が上がってくると、資料の劣化も進むだけでなく、作業環境も過酷になるということで、臨時レスキュースタッフの応援も得て作業を急いだ。五月六日に民俗と歴史の収蔵品は、収蔵庫からすべて搬出を終えるところまでこぎつけた。

搬出した古文書類は、劣化の進行を抑えるためいったん冷凍保管した。民俗資料は、洗浄後乾燥した上で、館内に仮設置した設備を用いて燻蒸し、その後順次外部の保管庫への搬出を進めた。こうして一〇月には、冷凍保管している古文書類以外のほとんどの収蔵品を館内から搬出した。

次は、歴史分野の古文書類のレスキュー活動（以下古文書レスキュー）の具体的な工程、つまりいったん冷凍保管している古文書類をどのように解凍して解体・洗浄・乾燥していくか、ということが大きな課題であった。国立歴史民俗博物館の天野真志氏をはじめとする外部の専門家の助言と指導も受けながら、選別↓記録↓解体↓洗浄↓乾燥という一連の作業の流れを作っていくことになった。

古文書類は、自然に乾燥させる方法もあるが、今回被災した古文書類は膨大な数に上り、真空凍結乾燥機も併用することが検討された。令和二年七月の奈良文化財研究所における真空凍結乾燥機の利用の講習などを経て、令和二年度末に当館